

第4課 厳しい道

【暗唱聖句】

「わたしは主を待ち望む。主は御顔をヤコブの家に隠しておられるがなおわたしは彼に望みをかける」イザヤ 8:17

【日曜日・実現した預言】

「その子が災いを退け幸いを選ぶことを知る前にあなたの恐れる二人の王の領土は必ず捨てられる」イザヤ 7:16

「その子」とは 7:13 に預言された「おとめが身ごもって産む男の子・インマヌエル」、すなわちイエス様のこと。イエス様はいつの世にも私たちと共におられる救い主なのだ分かる。二人の王すなわちシリア（アラム人）の王と北イスラエル（エフライム人）の王の領土が、間もなく消滅するという預言。この預言は紀元前 734 年頃に与えられた。紀元前 734～733 年にアッシリアは北の連合国を破り、ガリラヤと北イスラエルのヨルダン川東岸地方を征服し、アッシリアの属州とする。紀元前 733～732 年にシリアの首都ダマスコを征服しアッシリアの属州とする。イザヤの預言からわずか 2 年あまりで、二つの王の時代は終わる。さらにアッシリアは紀元前 722 年に首都サマリアを完全に占領し、イスラエル人を追放する。これにより北の 10 部族は離散、地域住民に吸収され、イスラエル人としてのアイデンティティを失う。

「彼は凝乳と蜂蜜を食べ物とする」（イザヤ 7:15）

凝乳と蜂蜜は、母乳がでない赤ちゃんの食べ物。このような状況の中で、ユダ王国は辛く貧しい時代を通ることになるが、それでも神様は養って下さるという約束である。

【月曜日・予見された結果】

「主は、あなたとあなたの民と父祖の家の上に、エフライムがユダから分かれて以来、臨んだことのないような日々を臨ませる。アッシリアの王がそれだ。」イザヤ 7:17

神様は、シリアと北イスラエルがアッシリアによって滅ぼされることを預言されたが、同時に同じアッシリアによって南ユダにもいまだかつて臨んだことのないような困難が臨むと語られた。神様ではなくアッシリアに助けを求めたユダは、そのアッシリアによって攻撃を受けることになるのであった。その場しのぎで考えた「敵の敵は友」は、やはり敵だった。神様ではなくこの世のもので問題の解決を図ろうとすると、私たちも思ってもみなかったようなさらなる困難に直面することがある。困難が大きければ大きいほど、神様だけを頼りにしなければならぬ。

アハズはシリアの首都であり、アッシリアによって征服されたダマスコにあった祭壇と同じものをユダに造らせ、その祭壇に捧げ物をささげ、主の祭壇は脇に移動させた（列王記下 16 章）。しかし、アッシリアの王ティグラト・ピレセルは、手のひらをかえしてアハズを攻めはじめた。アハズは「主の神殿、王宮、高官の家の財産を一部アッシリアの王に差し出したが、何の助けにもならなかった」（歴代誌下 28:21）。そこで「アハズは神殿の祭具を集めて粉々に砕き、主の神殿の扉を閉じる一方、エルサレムのあらゆる街角に祭壇を築いて…他の神々に香をたいた」。異教の神々の力を頼ったのである。このことはさらなる「主の怒りを招くこととなった」（歴代誌下 28:24、25）。

【火曜日・名前が意味しているもの】

イザヤ書 8 章は 7 章を補強している。イザヤは 2 番目の息子に、「マヘル・シャルル・ハシュ・バズ（分捕りは早く、略奪は速やかに来る）」という預言的な名前をつけるように主から言われる。そして、「この子がお父さん、お母さんと言えるようになる前に、ダマスコ（シリア）からはその富が、サマリア（北イスラエル）からはその戦利品が、アッシリアの王の前に運び去られる」（8:4）と、告げられる。そして、その通りになったわけだが、アッシリアはシリアと北イスラエルだけでなく、激流となってユダをも襲ってくると告げられた。

「それゆえ見よ、主は大河の激流を、彼らの上に襲いかからせようとしておられる。すなわち、アッシリアの王

とそのすべての栄光を。激流はどの川床も満たし、至るところで堤防を越え、ユダにみなぎり、首に達し、溢れ、押し流す。その広げた翼は、インマヌエルよ、あなたの国土を覆い尽くす。」イザヤ 8:7, 8

ユダの審判に先立ってシリア・エフライム連合軍の審判を語ることは、悔い改めへの招きの意味があったが、アハズ王はそれを理解できなかった。ゆえにアッシリアの攻撃にさらされることになる。しかし、アッシリアの攻撃によって徹底した破壊に到らせることはできないと、イザヤは断言する。

「諸国の民よ、連合せよ、だがおののけ。遠い国々よ、共に耳を傾けよ。武装せよ、だが、おののけ。武装せよ、だが、おののけ。戦略を練るがよい、だが、挫折する。決定するがよい、だが、実現することはない。神が我らと共におられる（インマヌエル）のだから。」イザヤ 8:10

アッシリアがどれほど戦略を練ってもうまくいかない。なぜなら神様が我らと共におられるから。これはイザヤ書を貫くテーマである。

【水曜日・神を畏れる者に恐れはない】

「あなたたちは…彼らが恐れるものを、恐れてはならない。その前におののいてはならない。万軍の主をのみ、聖なる方とせよ。あなたたちが畏るべき方は主。御前におののくべき方は主」 8:12、13

普通の人々が恐れるものを恐れてはならんと聖書は言う。そして、私たちが畏れるものとは、ただ主なる神だけだと教える。たとえば、新型コロナを恐れるのではなく、神様を畏れるのである。神を畏れるとは、恐怖するのとは異なり、絶対的・最終的権威として認めることである。それは、『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛』（マタイ 22:37）するという形になって表れる。神を畏れるとき、この世の恐れは消えて行く。これは第一ヨハネ 4:18 の「愛には恐れがない」という御言葉が成就するからである。神は愛である。だから神を畏れ敬うものに愛の神は満ちて行き、恐れが消えてしまうのである。もしこの世の事柄を恐れるなら、それは神の愛がその人の中で全うされていないことになる。言い換えれば神への恐れがないことになる。自己吟味してみる必要がある。

【木曜日・忘恩の民】

イザヤは「わたしは弟子たちと共に証しの書を守り、教えを封じておこう」（イザヤ 8:16）と言う。それは「人々は必ずあなたたちに言う。「ささやきつぶやく口寄せや、霊媒に伺いを立てよ…」」（イザヤ 8:19）とあるように、人々は異教の宗教に深く関わり、そこから救いを得ようとしているからである。だから、「主は御顔をヤコブの家に隠しておられる」（イザヤ 8:17）のである。口寄せや、霊媒に伺いを立てても、そこにあるのは、「苦難と闇、暗黒と苦悩、暗闇と追放であり、今、苦悩の中にある人々には逃れるすべがない」のである（イザヤ 8:22）。申命記 18:14 に、「あなたが追い払おうとしているこれらの国々の民は、卜者（ぼくしゃ）や占い師に尋ねるが、あなたの神、主はあなたがそうすることをお許しにならない」と教えられている。この教えは、この時代だけでなく今ももちろん同様である。

しかし、イザヤはそのような霊的墮落が蔓延する国の中であってなお、「わたしは主を待ち望む。主は御顔をヤコブの家に隠しておられるが、なおわたしは、彼に望みをかける」（イザヤ 8:17）と言うのである。人間的には絶望的に思えるような状況の中でもなお、主に信頼していくのが本当の信仰である。